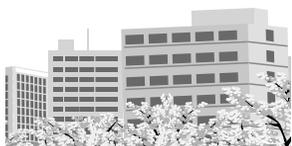


会員の広場



塩野七生讃

廣中 聰（東京）

塩野七生女史（イタリア在住。歴史作家で「文化功労者」）は、私のお気に入りの作家のひとつです。きっかけは、半世紀前の「ルネサンスの女たち」「チェーザレ」「神の代理人」。彼女の作品の魅力は、スタイルにあります。まず執筆哲学です。「歴史を書く作業は、歴

史と切り結ぶことだと思う。自らの全知能と全存在を賭けて決闘することだと思う。」この志や良し。年齢を加えるにつれ円熟味を増し、韓国・中国に読者を得ました。文章は、センテンスの短い、明解で力強いもので、爽快感、色気すら感じます。

「ローマ人の物語」に始まる歴史エッセイを毎年1冊刊行、25年継続しました。大きな魅力の一つは、彼女が惚れ抜いた超一流の「男たち」に接近すべく、膨大な資料を集め（それも原典第一主義）読み解き、考え抜いて、「知りたいと思っていること」を書いていることです。ハンニバル、カエサル、アウグストゥス、ペリクレス、アレクサンドロス、フリードリッヒ二世など、とても魅力的です。

コロナ禍、2017年刊の「アレクサンドロス大王伝」にリーダー像を求めています。

曰く「戦場では兵士は肉体で闘うが、総司令官は頭脳で闘う」「兵站を重要視しない司令官は、戦闘には勝っても戦争には勝てない」「この人を評する一語は「スピード」

彼女は、歴史エッセイに並行して、文春誌「日本人へ」を寄稿しています。示唆に富む洞察の一例が「戦略」についてです。戦後の日本人は、この言葉に抵抗感を示した。「だが日本にも、昔から戦略的思考はあったのだ。「肉を斬らせて骨を断つ」くらい、本物の戦略はない」。また古代ギリシャ以来使われてきたこの言葉の意味の一つに「予期しなかった困難に遭遇してもそれを解決していく才能

がある。有権者が今の政治家に求めるのはこの種の資質ではないか」と。

さらに、「50年も歴史を書いたの平凡な結論は、自らの持てる力を活用できた国だけが勝ち残る。」プレーボーイになれない日本人の場合、その気になればやれることに、エネルギーを集中することだ。それは経済力のさらなる向上だと言えます。ユニクロの柳井正氏が、普通の人はできないことを考える、自分ではできないことを考える。内向して成長はなく、世界中で情報を集めて経営してゆくと発言していました。そういえば、彼女の短文では、「（以前批判的にコメントした柳井氏と）会って話したら、意外にも気が合うのでは」と言っています。